

カルロス・ルイス・サフォン著、木村裕美訳「天使のゲーム、下」集英社文庫、集英社 2012 年 7 月 25 日刊を読む

1. (1) 1928 年、バルセロナ——。
(2) 旧市街の「塔の館」に住む若き作家ダビッド・マルティンは、ある日「忘れられた本の墓場」で奇妙な宗教書らしき本を見つけ、家にもち帰る。
(3) その 1 週間後、謎の編集者から断れないオファーを受けて、かつて世に存在しなかった作品の執筆にとりかかるのだが、その彼の周辺で、不可解な出来事が起こりだした。
(4) 少年のころから懂れて、移り住んだ「塔の館」、その元家主とおなじ運命を、自身もたどりはじめていることに、彼はしだいに気づいていく…。
2. (1) 世界じゅうの本好きな読者を魅了した『風の影』(2001)から 7 年、カルロス・ルイス・サフォンの待望の新作、『天使のゲーム』(原題 *El juego del Ángel*)は、「忘れられた本の墓場」四部作の第二弾である。
(2) 2008 年 4 月に上梓され、スペイン語原書の初版発行部数が 100 万部。紙上報道によれば、店頭に出てわずか 4 日で 23 万部、1 週間後には 57 万部という驚異的な数字を記録し、待ちに待ったサフォンマニアたちの読者魂を再び熱くした。『風の影』と併せて、全世界で 2000 万部を超えており、アメリカやヨーロッパ諸国で多くの文学賞も受けている。
3. (1) 生きて書きつづけたがために魂を売ってしまった 1 作家のドラマ『天使のゲーム』は、ファウスト的色彩をおびた濃密なミステリー大作であり、とどかない愛の物語だ。刊行に先立って、作者自身が“『風の影』のゴシックな妹”と紹介していたが、読んでみると、なるほどど領ける。
(2) 前作が人情味あふれるスペインの庶民歌劇とすれば、本書は三幕物の荘厳なゴシック・オペラ、そのなかに、かぎりない切なさ^{サルスエラ}と優しさがただようのは、やはりサフォンらしい。
4. (1) 前作が“読む側”の視点で展開したのに対し、本書では“書く側”に視点に移り、作家ダビッド・マルティンの一人称で語られる。
(2) 背景は、不穏な平和のむこうに内戦の遠音がきこえる 1917 年から 1929 年。^{とおね}
(3) ディケンズの『大いなる遺産』(原題 *Great expectations*) スペイン語版では *Grandes esperanzas*) をモチーフにした主人公の少年時代を皮切りに、影の都市バルセロナは、その陰影をいっそう濃くしていく。

[コメント]

カルロス・ルイス・サフォン著、木村裕美さん訳の「天使のゲーム」(下)の訳者あと書き。成熟社会の知識人が愛してやまないスペインの大ベストセラー。「風の影」の続編、「天使の囚人」の前に読むべき作品。是非、御一読を。